

「地域の多様な家族が孤立しないために私たちができること」

ひきこもる若者/オトナと家族 の困りごと

～いわゆる「8050問題」を考える～

ゲストスピーカー：池上正樹さん

(NPO法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会理事/ジャーナリスト)

◆ゲストスピーカー池上正樹さんのお話(要約)

池上正樹さんは、大人の「ひきこもり」の人たちへの取材を20年以上続けてきました。毎日当事者からメールが届き、会える人とは面会されています。全国の社会福祉の現場の人たちと接することも多く、すべて取材等を通じた事実をベースにお話してくださいました。



●事件との関係

川崎市殺傷事件以降、KHJ全国ひきこもり家族会連合会への相談が急増しました。初めて電話をしてきた人が大半（当事者家族7割、当事者3割）、いずれも公的支援につなげていない、危機的な状況の人が多かったです。

それに対し、「死ぬなら一人で死ぬべき」「不良品」「モンスター予備軍」という心ない言葉が独り歩きし、本人とその親をも追いつめ、新たな悲劇を誘発しかねない状況です。しかし、ひきこもりの状態が要因で事件が起きるわけではありません。

学校や職場等で傷ついた経験から「怖い」という思いが蓄積、「社会は不安な所、家の中は安全安心」と家にひきこもり、辛うじて生きている人たちが大半です。理由もなく外に飛び出し、無関係な人に危害を加えることは考えにくいです。何か危機的な状況がきっかけとなり、当事者が事件を起こすことはあるかもしれませんが、その場合は「危機的な状況」が何かを解明する必要があります。

家族会会員は、事件後も冷静でした。当事者間の横のつながりがあったからだと思います。家族会や当事者会等に行けば、同じように傷つき悩んでいる当事者や家族がいます。自分だけではないと知ることだけでも気持ちは随分変わります。悩んでいたなら、まず家族会に相談してください。

●「ひきこもり」とは

厚生労働省のひきこもりの定義

「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせず、6か月以上続けて自宅にひきこもっている状態」

「人と交流ができない」ことが大きな特徴です。

社会的地位や資格を喪失することで、どの年代も、誰もが、「ひきこもり」状態になり得ます。

●内閣府40歳以上ひきこもり実態調査 3/29公表より

40歳以上でひきこもり状態の人の数は、61万人。実際にはこの2倍以上いると、私は見えています。

40歳を超えてひきこもりになった人が、半数以上（57%）。

「誰にも相談しない」と答えた人が、5割弱。

厚生労働大臣は、「中高年ひきこもりは新しい社会的課題だ」との見解を示しました。ですが、少なくとも20年前からいました。国の対策が立ち遅れていることは否めません。

●ひきこもる背景は多様 一人ひとり違う

ひきこもる要因は、リストラ、いじめ、ハラスメント、DV、病気、介護、災害・事件事故など、一人ひとり違い、背景も状況も様々です。

ひきこもる人は、

カンがいい人が多く、相手に気遣いし過ぎて気疲れしてしまう、頼まれたことを断ることができない、やり続けて燃え尽きてしまう、助けを求められない、相談できない、というタイプが多いです。逆に、空気が全く読めず、コミュニティの中で浮いてしまうタイプの人もあります。

いずれにしても、自分の命や価値観を守るために回避を繰り返さざるを得なかった人たちです。夫以外の人との関わりがない専業主婦や家事手伝いの女性、LGBTXの方などが、当事者の中に一定数存在することがわかってきました。ひきこもる人も多様化しています。

●当事者たちからの主な声

「話を聞いてもらえない」「どこにも居場所がない」という声が多いです。親から、「学校に行け」「働け」と言われ、家の中でも安心できず行き詰まっています。地方では、「人が怖い。周囲の視線が気になる」という声が聞かれます。

制度上の問題として、これまで40歳～64歳の人への支援はないに等しく、障害認定も受けていないため、相談しても支援を断られることがよくあります。そのため、「早く死んでくれと社会から言われているように感じる」と話す人もいます。それでも、多くの当事者が、「生きたいと思えるようになりたい」と感じています。

●8050(7040)問題から見える現実

ひきこもりの問題は、1980年代は「若者問題」、2000年代は「就労問題」と捉えられ、就労支援が盛んに行われました。現在は、状態が長期化した結果、親が80代、子どもが50代になり、「8050問題」と認識されています。

親に共通するのは、「ひきこもる子の存在が恥しい、知られたくない」心理です。近所に隠し、うまくいっている家を演じます。子どもは親から隠される存在だと感じ、ますます重荷に思います。

「8050（7040）問題」は、親の年金で生活し、家族全体が孤立し貧困状態に陥っていることがあります。ただ、親亡き後の事例から見える最大の問題は、お金ではなく、本人が生きる意義や意欲を見出せないことです。

●なぜ発見できないのか

ひきこもり支援の相談窓口が明確ではなく、途中で諦めてしまう当事者・家族がいます。最初から諦めていたわけではない点が重要です。

問題が発見されても、支援側の体制が縦割りで解決できなかったケースもあります。役所側も、特化した部署も人材もない、支援に展開させる仕組みもないので、どう対応したらよいかわかりません。この問題は取りこぼされてきたのです。

●支援の途絶問題

KHJ家族会調査では、本人42%、家族45%が、「支援は継続しなかった」と答えています。ひきこもり支援に対応する法律がない、という制度上の問題が大きく関わっています。

支援が途絶えることで、家族が孤立するリスクは高まります。「親の育て方が悪いと責められるから行きたくなくなった」との回答もあり、相談を受ける側のコミュニケーション自体の問題も考えられます。

●孤立すると重症化する

家族の中で、役割分担をして欲しいです。本人が親と話をしないならば、おじいちゃんおばあちゃんが本人と話をし、というように、身近に誰か一人でも、当事者の理解者がいれば違う展開になります。そして、本人の発言や行為、発案を肯定することです。

オリンピックのカーリング女子チームのように「そだねー」の一言が、人と人がつながる魔法の言葉に変わります。孤立した当事者につらい言葉を投げれば、追いつめて重症化し、悲劇に至ることがあります。親は、ひきこもる子の存在を隠すことで自らも孤立します。本人を責めない、追いつめない、家族を孤立させないことが大事です。

<潜在化、長期高齢化の要因>

*当日配布資料より抜粋

①一度レールから外れると、戻れなくなる社会の構造

②「尖った部分を社会に当てはめる」型支援に適合できない(支援の枠組みの失敗)

⇒従来の職場に押し戻す目的で社会適応の訓練を主体にした就労支援は、ひきこもり支援にはなじまない

⇒就労支援はなじまない

個々の生き方支援へ

●ひきこもり状態にある人、すべてが、家庭内暴力を起こすわけではない

ひきこもり状態にある人すべてが家庭内暴力を起こすわけではありません。

KHJ家族会の会員調査によると、

家庭内暴力があるのは、544人中18人 (3.3%)

過去に暴力を振るわれたことがある人は544人中123人 (22.6%)

家庭内暴力に行き着くまでには長いストーリーがあり、「なぜ親に何も話さないか」から始まります。過去子どもも話していたかもしれない。ところが、言葉にして痛い目に遭ったという歴史が親子間で繰り返され、子どもは諦めて親に話さなくなることがあります。親の側の価値観による答えが常にあり、会話をしてもその価値観が出た瞬間に子どもの言葉はなくなります。

ひきこもる人は優しい人が多く、最初は親に手を出しません。代償行為で壁や物に当たり、それがエスカレートし、ついに親に暴力を振るってしまいます。親が子どもを否定する、追いつめる、また、「戻そう」「治そう」「正そう」と強要することで、当事者は人間としての存在価値を感じられなくなっていきます。

●家庭内暴力に遭ったら

家庭内暴力に万が一遭ってしまったら、一時避難をします。その際、「見捨てるのではなく、ただ暴力が嫌だから」「痛いから」「怖いから」と、本人に明確に理由を伝えます。

家族で抱え込まず、できれば公的機関、家族会などに相談してほしいです。第三者が介入する場合は、家族の側ではなく、当事者の側に立たないと中立にはなりません。親と約束をして、役割として敢えて当事者の側に立つことが大事です。

●暴力的“支援”業者には注意

家族が、ひきこもる人の支援を他人に丸投げし、他人が就労支援を持ち込むことが、話題の暴力的支援業者を暗躍させることにもつながります。

暴力的支援業者の定義は、「本人の同意なく支援を押し付ける。対象者の自由を奪ったまま支配的な支援を強要する」です。支配関係をつくることに特徴があります。

本人の意思を無視し嘘をついて家から連れ出し、支援プログラムもない状態で監禁するという、ひどい人権侵害です。脱出してきた当事者たちの大半がPTSDで苦しみ、家族を恨み、親子断絶状態になっていますので、決してこうした業者を安易に頼ってはいけません。「暴力的『ひきこもり支援』施設問題を考える会」という当事者の会が立ち上がっています。ガイドラインを作るなど、対策を考えていかなければいけません。

●当事者たちが苦しめられている価値観を新しく再構築する

親は、他人との比較、評価を気にしがちで、周囲の価値観に追いつめられます。当事者も、「働かなければいけない」「働いていない自分は発言してはいけない」という無意識のバイアスに囚われます。当事者は沈黙して孤立し、社会から見えなくなります。

ひきこもる行為は、自分の価値観、命や尊厳を守るために、自死ではなく生き続ける道としての選択肢でもあります。

親子の価値観の違いもあります。働くことが前提の親時代とは背景が変わっています。社会にも余裕がありません。「ちゃんとしなければいけない」という価値観に囚われるところから孤立は生まれます。

当事者を苦しめる価値観を再構築するためにも、登校至上主義、就労至上主義の呪縛から解き放たれ、皆が生きたいと思える社会をつくっていかねばなりません。

●ひきこもる本人よりもまず家族支援

ひきこもる状態が長期化すると、自分から動くのはなかなか難しいです。本人を何とかしようとするよりも、悩みを抱える家族をまず支え、親の愚痴を聞いてあげられる人を育てることが大事です。

親は、どうしても子どもを責めてしまいます。ですが、家の中で本人に直接言うのではなく、家族会などで子どもの悪口を思い切り言ってもらいます。すっきりして家に帰れば、子どもは親の様子をよく見えていますので、それだけでも違ってきます。

必要なのは、

**価値観
革命**

●ひきこもり支援で望まれる施策

就労を望む人には、政府のプランにある就労支援をすればよいです。しかし一律に、一定の期間内に就労させる取り組みには無理があります。

就労支援と「生き方支援」をはっきり分ける必要があります。必要なのは、就労成果を目的とした支援ではなく、本人が生きる意欲をもてるような、一人ひとりの方向性に寄り添う居場所づくりです。

ひきこもり支援の法的根拠は、子ども・若者育成支援推進法ではなく、生活困窮者自立支援法に一本化することが必要でしょう。現在、厚生労働省から通達が出されています。

ひきこもる人の心の特性や気持ちを理解できるスタッフの配置、その育成のための予算も必要です。地域の支援協議会の中心には、当事者や家族を置くべきです。家族や当事者の声をベースに、ひきこもり施策を構築していかなければいけません。

●つながりこそが生きる意欲や意義を生み出す

私たちが主催するひきこもりフューチャーセッション「庵-IORI-」という対話の場が、7年間続いています。ファシリテーターは入りますが、当事者が中心になってテーマを出します。そこでの対話から、ひきこもり新聞、ピアサポートゼミナール学習会の開催など、多様な流れが生まれています。

●相談窓口は明確に わかりやすさを伝える

相談窓口等の支援の入口に、「いつもそこにある」「仲間がいる」「目立たない所にある」「夜間・土休日も開いている」という多様性が求められます。自分の地域では相談しにくく、「遠くに行きたい」という声は非常に多いです。自治体間で連携し、相互利用できる仕組みも大事です。

●みんなが当事者

今は頑張っているけど、誰もが、いつ「ひきこもり」になるかわからない社会です。なので、みんなが当事者です。「大丈夫？」とさりげない一言をかけることで、たとえその声かけに本人が反応しなくても、本人は放っておかれていないと感じ、つながっているという安心感をもてます。そういうことをお互いに関心を持って、続けていくことが大事だと思います。自分の好きなことや趣味も、実は外とつながるきっかけになります。

<8050問題先進自治体> 2019年8月26日に初の「全国ひきこもり先進自治体首長サミット」開催。

・岡山県総社市社会福祉協議会の取り組み

2017年4月「ひきこもり支援センター」（愛称「ワンタッチ」）設置。養成したひきこもりサポーター中心に「ひきこもり家族会」や、居場所をつくっている。

・山口県宇部市支援プログラム

2015年4月～市役所に「ひきこもり相談窓口」開設。NPO「ふらっとコミュニティ」（山口大学大学院医学系研究科の山根俊恵教授）がひきこもり相談支援の事業を計画。居場所を拠点に諸事業実施。

・岩手県洋野町の発見⇒地域包括支援センターからのひきこもり支援

当時、地域包括支援センターの保健師（現・NPOエンパワメント輝き）大光テイ子さんが介護保険サービスの情報提供のため高齢者宅訪問。

・静岡県富士市 ユニバーサル就労推進条例

2017年4月～ユニバーサル就労支援。コンピューター制度（支援付き就労）企業と確認書を交わす。

◆講演後、参加者からは次のような質問・意見が活発に出されました。

- ・「8050問題」は、経済的な問題だと思っていた。
- ・「ひきこもり」と発達障害の関係性について。
- ・精神科の診断も受けていない人が、親が亡くなった後も生活できるようにする福祉サービス等の手立てを知りたい。
- ・誰にも相談しようとしていない人へのはたらきかけ方、安心して過ごせる居場所等有用な情報の伝え方について。
- ・正常と異常に分けた捉え方が支配的だが、全ての人が皆少しずつ違っていることを、もっと普通に受け止める考え方が必要ではないか。

◆「明日から自分が取り組めること」を各自が考え、キーワードを記入しました。
池上さんにキーワードを回覧いただいた上、まとめのコメントをお願いしました。

